

ベートーヴェンのピアノソナタの分析と解釈

末松 茂敏

Shigetoshi Suematsu

はじめに

ベートーヴェンのピアノソナタから《悲愴》《月光》《テンペスト》《ヴァルトシュタイン》《熱情》を取り上げて、和声の進行でどんな特徴があるか。調性構造はどうなっているか。各楽章間の共通の動機は使われているか。繰り返される同じ音に変化したとき、どのような表現をするか。第1主題、第2主題の特徴は何か。保続音が使われることによってどのような効果があるか。等を調べ演奏する時の助けとなることを見つけていきたい。なお、各曲で小節番号を書いているので楽譜を参照して頂きたい。ヘンレ版を使用している。

1. ベートーヴェン ピアノソナタ第8番 ハ短調 作品13《悲愴》

多くのベートーヴェンのピアノソナタのタイトルはベートーヴェンが付けた物ではないが、《悲愴》というタイトルはベートーヴェンが付けた数少ないソナタの内の1つである。第1楽章冒頭の Grave の1小節目で C-D-Es のように3度上行して Es-D と2度下行する音形が2、3、5、6、7小節目でも繰り返される。1小節から3小節は32分音符が一番細かい音符なので32分音符を心の中で数えながら弾くとリズムがきちんと取れる。c moll という調性は交響曲第5番《運命》と同じ調性である。1小節目は右手が C-D-Es と上行するのに対し左手は Es-D-C と下行する反行形になっている。4小節の3拍目で Es dur になるが5小節の4拍目で遮るように、c moll に戻る。5、6、7小節の反復進行だが3回目の7小節から3小節の長いフレーズになって、それまでの5、6小節の1小節単位のフレーズと対比がある。5小節からのバスの Es-D-C、6小節の H-B-A-G、7小節の Fis-F-D、8小節の H-As-G を聴くと良いと思う。11小節から第1主題で、11小節から98小節までフォルテがない。11小節から14小節まで右手は上行形だが、cresc. が書かれていないので大きくならないようにし、又11小節から15小節までバスはCの音が保続される。35小節から、39小節から、43小節からと3回のゼクエンツだが3回のゼクエンツは良く出て来る。

51 小節から第2主題だが、ここは es moll である。c moll で始まったので普通は平行調の Es dur に行く事が多いが、ここは es moll で第2主題が出る。この第2主題の B-Es-F-Ges の音型は第3楽章の G-C-D-Es と同じ音程関係で、ソナタの統一感がある。53 小節の右手は B-Ges と6度だが、56 小節で B-As と7度に広がるので、その違いを弾く時に感じると良い。67 小節で第2主題が Des dur になるが長調になる事で、ほっとした感じである。121 小節の第1主題は、第1主題で初めてフォルテが出てくる。11 小節目はピアノだった。132 小節の一番括弧は g moll の属七からI度の G-B-D に行かないで c moll の属七の G-F-H-D へ行くので解決するのを否定する感じで弾く。

133 小節から展開部だが1小節目と調性が違い g moll。143 小節から D の音がバスで 148 小節まで保続される。167 小節から3拍目と1拍目の頭の音が 170 小節まで Cis-D-C-H-Cis-D-C と C の辺りを中心に動くが 1799 年当時の音楽ファンが驚いてこれでも本当に音楽と呼べるものかどうか質問したそうだ。181 小節から 186 小節まで2小節ごとの音型が3回繰り返される。3回繰り返すのは、ベートーヴェンがよく使う方法である。

195 小節から再現部で、207 小節の3拍目から Des dur になるが、この調は 67 小節で第2主題で出てきた調、211 小節からの es moll は 51 小節でも使われた。また 215 小節からの fmoll は 221 小節からの第2主題でも使われる調である。第2主題が 237 小節で主調の c moll で繰り返され調的安定を取り戻す。293 小節と 305 小節の減七の和音を特別に緊張感を持って弾く。295 小節で再び Grave で同じリズムが3回繰り返される。299 小節から第1主題が出るが cresc. は 303 小節に書かれているので、そこまでは小さく弾く。309 小節の和音の音は冒頭の和音と同じ音が使われる。

第2楽章の冒頭の2小節は私が学生の時、和声の授業で先生が最高の配置とおっしゃった事が心に残っている。1小節の2拍目の属七の第3転回形の緊張感と2小節の2拍目の属七の第一転回形のほっとした所の違いを感じる。1小節目から8小節目までを三重奏、9小節目から16小節までを四重奏と考えても良いと思う。14小節の2拍目から15小節の1拍目にかけてII調の b moll の和声が使われたり、20小節で Es dur に転調した時、2拍目で Es dur のVI調の c moll の和声を使っている所以表情の多彩な変化がある。17、18小節でCの音が続くが和声によって表情を変えると良い。37小節で As dur の同主調の as moll になり 42、43小節で盛り上がり E dur になる。as moll から見ると E dur はVI調と言える。VI度の和音 Fes-As-Ces の異名同音 E-

Gis-H が E dur の主和音になる。

第3楽章の冒頭の G-C-D-Es は第1楽章の 237 小節でも使われた音である。又、第1楽章の 1 小節目で C-D-Es の音が使われるがこれらの音は3楽章の冒頭でも使われ、第1楽章の 2 小節目、F-G-As の音も第3楽章の 4 小節目から 5 小節目にかけて、8 小節目から 9 小節目にも使われる共通音である。このソナタは統一感がある。1、2 小節でト音記号の音で Es-D-C、3、4 小節目でヘ音記号に H-As-G と順次進行の 3 音がある。5、6 小節は 5 度の下行で AS-D、G-C が旋律として出てくる。それに対して右手の 37、38 小節では Es-As、左手は B から Es へ、44 小節の 4 拍目から 45 小節の 1 拍目へ F から B へ 4 度で上行する。43 小節で B-F と 5 度上行するが、第2楽章でも 17 小節の右手の最後の音から 18 小節で F から C と上行する他、38 小節の G-Des でも 5 度上行する。

第3楽章の 46 小節の 3 拍目のフランスの 6 の和音はバスの Ces を強調して和音の響きをよく感じたい。54、55 小節のバスの 2 分音符 As に sf がついているが 56 小節の 2 分音符の As にはついていない。前者は Es dur の属七であるが 56 小節は c moll の属九の根音省略の第 4 転回形になるので、不安定な感情からか sf が無いのかもしれない。64 小節の左手を見ると G の音が保続される。79 小節から右手は 4 度上行、左手は 5 度下行が出てくるが第3楽章の冒頭の 5、6 小節の As-D、G-C の 5 度下行と関連があり、また 37、38 小節の右手の 2 拍目終わりから 3 拍目の Es-As、37 小節の左手の 4 拍目終わりの B から次の 38 小節の頭の音 Es への 4 度上行と関連がある。

78 小節からはオーケストラの音をイメージする。78 小節からは管楽器、98 小節からは弦楽器も加わっているように感じる。107 小節から 120 小節まで属音の G の保続音が続き、音域が高くなり緊張感が高まり、120 小節から主題が戻る。134 小節で C dur になる所は明るく光が射すようである。159 小節で c moll へ、160 小節から Es dur、そして 164 小節の 4 拍目で c moll へ戻る。198 小節のナポリの 6 の和音はドラマチックで、高音の F から下行し 201 小節の Des へ到達する。199 小節で第2楽章の主調の As dur に行くが 207 小節で c moll に戻り、フォルティッシモで締めくくられる。

2. ベートーヴェン ピアノソナタ第 14 番 嬰ハ短調 作品 27-2《月光》

第1楽章はナポリの 6 の和声が多い。3 小節目の 3 拍目の Fis-A-D、21 小節の H-G-D、50 小節

の Fis-D-A で使われる。その事で陰りや不安を感じる。28 小節から属音の Gis の保続音が続き、30、31 小節は I 度、32 小節は属 9 の根音省略、33 小節は I 度、34 小節は V 調の gis moll の属 9 の根音省略、35 小節は属 9 の根音省略、38 小節は属 9 の根音省略で 4 拍目が IV、39 小節は 3 拍目がナポリの II、4 拍目が IV、40 小節は属 9 の根音省略と、Gis の上への和声は様々に変化していく。48 小節で *cresc.* をして音も H-His-Cis と上がっていくにもかかわらず、49 小節の Dis がピアノになるのが印象に残る。7 小節目の 3 拍目から 9 小節目まで、44 小節目の 3 拍目から 48 小節の 2 拍目まで、56 小節で E Dur になるが一瞬明るくなりほっとする。第 1 楽章の最後は Cis で終わるが第 2 楽章の開始和音が一番上の音が Des なので高さは 1 オクターブ違うが異名同音である。Attacca subito il seguente と書かれていて、すぐに次に続く様に指示しているが、Cis と Des の音のつながりを感じる事が大切だと思う。

第 2 楽章は明るくアウフタクトで始まる。全体に 3 拍目からフレーズが始まることが多い。掛留音も多く使われ 8 小節から 9 小節の Des、9 小節から 10 小節の B、10 小節から 11 小節の Des がそうである。Trio では As の音が 37 小節から 44 小節まで続く。45 小節から 48 小節まで属七が使われバスが D-Des-C-Ces と半音ずつ下がる。

第 3 楽章は 16 分音符が続くが弾き方として次の拍の 1 音目の 16 分音符に向かって弾くと良いと思う。Gis-Cis-E は Gis へ、Cis-E-Gis は Cis へと。感情の激しい楽章である。8 小節目でドイツの 6 が出てくるのでバスの A が次の Gis に向かう気持ちが強い。9 小節目から 14 小節まで属音の Gis の保続音が続く。28 小節で gis moll の V 度が次の 29 小節で I 度に行かないで cis moll の属七へ回避し解決していない。33 小節から 35 小節まで gis moll のナポリの 6 の和音の Cis E A が続く。36 小節は gis moll の属七が 3、4 拍目で使われ、次の 37 小節の 1 拍目で VI 度へ行き I 度へ解決するのを避けているので意外な気持ちで弾く。41、42 小節は 2 拍ごとにフォルテが書いてある。41 小節目の 1 拍目の gis moll のナポリの第 1 転回形から 3 拍目で V 調の dis moll の属 9 の根音省略形の第 1 転回形、42 小節の 1 拍目の I 度の第 2 転回形、3 拍目の属七の進行を良く味わう。50 小節の 1 拍目の裏からの属 9 のフォルテの和音が強烈に印象に残る。提示部の最後の 57 小節から 63 小節までは gis moll で主音の gis の上に I 度と属七が交互に出る。

65 小節からの 2 番括弧は fis moll の V 度から始まり 67 小節で属七の第 3 転回形、69 小節で I 度の第 1 転回形、70 小節で属七の第 1 転回形、71 小節で I 度へ収まる。87 小節から cis moll の属音の Gis の保続音が 99 小節まで続く。

123 小節の cis moll の V 度の第 1 転回形から 124 小節の 1 拍目は IV 調の fis moll の属七の第 3 転回形に行くので、普通だと I 度に行くので、解決するのを打ち消すように弾く。126 小節の 3 拍目、128 小節から 130 小節まで、132 小節の 2 拍目から 134 小節までナポリの 6 の Fis- A - D の和音が使われる。151 小節から 157 小節まで主音の Cis の保続音が使われ安定感がある。163 小節から 166 小節からの減七は否定的で緊張感がある。168 小節から倚音が使われ Cis、169 小節の Dis、170 小節の E は倚音なのでたつぷりと弾く。175 小節の cis moll の I 度→3 拍目で IV 調の fis moll の属七の第 3 転回形→176 小節の IV 度の第 1 転回形→3 拍目で IV 調の fis moll の V 度の第 1 転回形の進行では、バスの Cis→H→A→Eis の流れを大切に。その後、179 小節でナポリの 6 から 181 小節で V 調である gis moll の属 9 の根音省略形の第 1 転回形になるが、とても緊張感のある和音だ。187 小節は即興的で、今まで規制があった曲だが打ち破る。190 小節から 195 小節まで主音の Cis の保続音上に I 度と属七が繰り返され、196 小節から最後まで I 度の和声アルペッジョと和音で激しく閉めくられる。

3. ベートーヴェン ピアノソナタ第 17 番 ニ短調 作品 31-2《テンペスト》

第 1 楽章は倚音が多く使われる。3 小節目の 1、2、3 拍目の頭の G、F、E の音や 5 小節目の C、B、A の音等である。1 小節目で d moll で始まり 7 小節で F dur、9 小節の 4 拍目で g moll に、そして 10 小節の G-B-Es の和音で d moll へ転調し、この和音はナポリの 6 の和音である。第 1 主題は 1 小節から 6 小節で Largo、Allegro、Adagio とテンポの変化があり Largo ではアルペッジョ、Allegro では隣り合った 2 度の 8 分音符が連続して使われる。21 小節からの旋律を第 1 主題と見ることも出来ると思う。ここで使われる D-F-A-D は、1、2 小節目の A-Cis-E-A と同じ動機が使われる。21 小節からバスが D、25 小節で E、29 小節で F、31 小節で Gis、33 小節で A、35 小節で H、37 小節で C、38 小節で Dis、41 小節で E と上がっていく。55、57、59 小節で使われる D-F-B のナポリの 6 の和音が印象的。

99 小節から 108 小節まで右手で Cis の音が使われる。その後 109 小節で D、113 小節で E、117 小節で F と上がっていく。99 小節からの Allegro では 3 連符が多用される。99 小節の左手で Fis で始まり 103 小節で Gis、107 小節で A、109 小節で H、113 小節で C、115 小節で Cis、117 小節で D と上行していく。和声は 99 小節から fis moll の I 度、103 小節から属七の第 2 転回形、107 小節から I 度の第 1 転回形、109 小節から IV 度、111 小節でナポリの 6、C dur で考え

るとV度の第1転回形、113小節でC durのI度から115小節でd mollのV度の第1転回形、117小節でI度と進行する。

143小節から148小節のLargoはレチタティーヴォ。161小節はfis mollのI度で163小節はVI度の第1転回形であり、又g mollのV度の第1転回形でもあり、この和声でg mollにスムーズに転調していく。189小節から192小節で右手の上の音でDの保続音が使われる。205、206、209、210、213、214小節でバスにd mollの属音のAの保続音が使われ217小節でI度へと収まる。

第2楽章は管弦楽のイメージを持って弾くと良いと思う。1小節目は弦楽器、2小節目はフルートが使われているように感じる。11小節目でGesが使われることによりB durの属9の準固有和音である。14小節目の1拍目の属七からI度に解決しないで、3拍目でVI調のg mollの属9の根音省略形の第1転回形のFis-C-Es-Aと回避する。24小節の2つ目のGis-C-Eの和音でGisはGの音に対する上方変位である。同様に26小節の右手の2つ目のGisの音もGに対する上方変位。38小節からFの保続音上に39、40、41小節で減七の和音が使われる。45小節でEs→F→Gesと進むがこのGesの音も準固有和音で印象的だ。60小節、62小節の3拍目で使われるFis-B-Dの増3和音もよく感じて弾く。65小節から71小節までB durの属音のFの保続音上に68小節のG-B-Des-Eの準固有和音など様々な和音で進行していく。80小節から主音のBの音の保続音で安定する。91小節から93小節にかけて音域をすごく変えている。

第3楽章は執拗に出だしの音形が繰り返される。《エリーゼのために》も同様である。1小節目から左手の符点8分音符と8分音符がタイで結ばれフィンガーペダルになっている。30小節から左手にメロディが出る。43小節から48小節までFとEの執拗な繰り返し。87小節から90小節にかけてAとGisが強調される。95、96、97小節のEs-A-B-CのA-B-Cは出だしのA-F-E-DのF-E-Dの音の反行形。148小節のフォルティッシモは叫びのように感じる。158小節から168小節までBの保続音がある。169小節で右手が2声になる。193小節から198小節で属9とI度の和声が3回繰り返される。233小節でB durのII度に行くが、225小節との違いを感じて弾く。246、254、262小節の属7の和声はしっかり弾く。270小節でイタリアの6のB-D-Gisの音が使われるのでバスのBからAの音の進行を良く聴く事。271小節から276小節までBとAの音が、同様に279小節から284小節も繰り返される。315小節から318小節までDとCisの音が強調される。350小節から358小節まで右手の内声にメロディがあり右手が二声になる。

373 小節のスフォルツァートの A の音、また 377 小節のスフォルツァートの D の音と、381 小節でフォルティッシモの F の音を印象的に弾く事。397 から 399 小節の最後は忽然と終わる。

4. ベートーヴェン ピアノソナタ第 21 番 ハ長調 作品 53《ヴァルトシュタイン》

第 1 楽章の第 1 主題の 2 小節目から 3 小節目にかけて E-Fis-G と上行するが、それに対して第 2 主題の 35 小節目からの音は Gis-Fis-E-Dis-Cis と下行しているので反行している。1 小節目のバスは C から始まり 3 小節目で H、5 小節目で B、7 小節目で A、8 小節目で As、9 小節で G と半音ずつ下がる。1 小節目を G dur と考えると C-G-C-E の和音は IV 度で、2 小節目の 4 拍目で属 7 の第 3 転回形、3 小節目の 1 拍目で I 度の第 1 転回形になり、5 小節目から Fdur と考えると 5 小節目は IV 度、6 小節目の 4 拍目で属 7 の第 3 転回形、7 小節目の 1 拍目で I 度の第 1 転回形となり同じ和声が続くことになる。2 小節目の 3、4 拍目の E-Fis-G の 3 音の上行と 3 小節目の H-A-G の下行で対比している。14 小節からは第 1 主題の確保で、22 小節で e moll で考えると C-E-Ais の音はイタリアの 6 の和声なので、バスの C から次の小節の 23 小節の H の動きを良く聴く事が大切である。23 小節から 30 小節まで e moll の属音の H の音の上に V 度、属七と I 度の和声が交互に出てくる。35 小節から E dur で第 2 主題が出る。第 1 主題は C dur なので長 3 度上の調に進むのは珍しい。ヘンレ版を見ると 35 小節から 37 小節のト音記号で一番上の声部だけ棒が上向きなので、上の声部を良く響かせることが大切だと思う。43 小節から第 2 主題の変奏で、44 小節と 48 小節の 1 拍目に E dur の VI 調の cis moll の属七の Gis-His-Dis-Fis が使われ、普通は cis moll の I 度に進行するが 44 小節と 48 小節の 3 拍目で E dur の IV 度の A-Cis-E へ回避するので意外な感じで弾く。52、53 小節でシンコペーションで生き生きとなり 54 小節から 59 小節で、I 度と属 7 が交互に繰り返される。62 小節のバスの A、64 小節の Ais、66 小節の H のバスの進行は大切なので良く聴くこと。H のバスの音は 71 小節まで続く。70 小節で C が使われ一瞬 e moll の和声が使われるが 72 小節で Cis になるのでその変化を感じる事が大切である。C dur のカデンツがようやく 84 小節から 1 番括弧の 86 小節で出てくる。ここまでは C dur の I 度で始まってもその後 C dur の I 度へ落ち着くことはなかった。

展開部は 90 小節から始まる。91 小節のバスの F の音は本当は半音下の E の音に進むはずだが(2 小節のバスの C は 3 小節は H に進んでいる)当時の鍵盤の音域として無かった。90 小節で F dur、91 小節で C dur、93 小節で c moll、94 小節で g moll、99 小節で c moll、103 小節の 3 拍

目で f moll、105 小節で Ces dur、106 小節で b moll、107 小節で As dur、108 小節で Ges dur、109 小節で f moll と、めまぐるしく転調していく。111 小節の 3 連符の拍の頭の E-Es-D-Des から次の小節の C の音の進行は大切で、4 拍目はイタリアの 6 の和声が使われるので Des の音を良く聴くと良いと思う。112 小節からの新しいフレーズの特徴は 114、115 小節、118、119 小節、122、123 小節、124 小節から 140 小節でタイを伴った指を押さえたフィンガーペダルが使われる。その事でフィンガーペダルをしている所の和声ははっきり浮かび上がってくる。142 小節から G-C-H-A の 16 分音符が 152 小節まで出てくる。146 小節の H-C-D の音は、3 小節の H-A-G と同じリズムであり、146 小節のへ音記号の H-A-G に対する反進行で、この反進行は 155 小節まで続く。この順次進行で上行する 3 つの音は、ベートーヴェンの交響曲第 4 番の第 1 楽章でも同じパッセージが使われるが作曲した年が近い。152 小節で G-C-H-A が G-Cis-H-A に変化し、153 小節で G-D-H-A に変わるので変化する音をよく聴く事が大切。

156 小節から再現部。168 小節で変化があり 12、13 小節は C-G-Es-C-G だが、ここは C-G-Es-C-As と最後の音が変わる。196 小節からの第 2 主題は A dur で始まり、200 小節では A dur でなく C dur の VI 度の A-C-E の和音へと進む。ここに対応する提示部の第 2 主題の 35 小節は E dur で始まり 39 小節からも E dur のままである。半音の違いが印象深いのは 231 小節の As と 233 小節の A、236 小節の As と 240 小節の A、245 小節の 2 拍目のバスの A と 247 小節の 2 拍目の As。248 小節は f moll の I 度の第 2 転回形→属七→249 小節で VI 度と偽終止になり、249 小節から長いコードが始まる。255 小節からスフォルツァートを伴って 2 拍ごとに緊張感が高まり 257 小節で C dur の V 調の G dur の属 9 の根音省略の準固有和音の第 2 転回形になり、255 小節から 259 小節のフレーズの山になる。261 小節から 268 小節はへ音記号の方に第 1 主題が出る。272 小節からスフォルツァートを伴った 2 拍ごとの反復進行が繰り返され 275 小節は E-Gis-C の増三和音の音が印象深い。275 小節の Gis は G と次の 276 小節の A の経過音。280、281 小節は G-E-Dis-E と G-C-H-C の音が左手と右手で入れ換えられる。290 小節は G-A-H と長調、291、292 小節は G-As-H と短調で、293、294 小節で再び G-A-H と長調になるので A-As-A の音の変化をよく味わうことが大切。

第 2 楽章は 1 小節目の 4 拍目から 6 拍目で a moll で考えるとイタリアの 6 の和声の F-A-Dis の音が、5 小節目の 4 拍目から 6 拍目も F dur で考えるとイタリアの 6 の和声が使われるので、1 小節目のバスの F の音から次の E への進行、5 小節のバスの Des から C への進行をよく味わ

う事。11小節目、13小節目は多声部的に書かれている。属七からVI度への和声進行の6小節目から7小節目、26小節目のGis-H-D-Fの音から27小節目のVI度のA-C-Eの和声進行が印象深い。2楽章の最後はGの音で終わるが、Gott(ドイツ語で神)の頭文字である音でGottへ語っているように私は感じる。

第3楽章の15小節のEs、17小節のE、19小節のEsと半音を行きかうので変化を感じる。86小節から98小節までAの音が保続される。106小節からのF-F-D-H-G-Fは第2楽章の24小節、25小節の右手のF-D-H-F-D-Hと使われている音と下行で共通性がある。この3楽章で特徴的なのはペダルの長さである。ペダルが1小節から8小節、9小節から12小節、13小節から22小節まで続くが、違うハーモニーがあるにもかかわらずペダル記号が続いている。152小節から166小節まで属音のGの保続音が続く。175小節からc mollになり177小節からc mollのIV調のfmoll、179小節からはc mollのVI調のAs durになる。189、190小節ではAs durのVを基本として経過和音が使われる。Hの音が3回スフォルツァートで印象深くあらわれるのは197、205、209小節でこのHによってc mollへ転調する。221小節から224小節までAsの保続音が、225小節から228小節までFの保続音が、229小節から240小節まではDesの保続音が使われる。各フレーズの調性の主音なので安定感がある。

344小節から348小節まで主音のCの保続音、352小節から360小節までもCの保続音、368小節から402小節まで属音のGの保続音が使われ、377小節まではV度とV調のG durの属七の音が交互に出て繰り返される。378小節からC durのV度、382小節からは属7、386小節から属9の準固有和音が使われ緊張感が高まる。403小節からプレスティッシモで主題のテンポが速くなる。441小節からAs durになり444小節でfmoll、449小節でDes durになるが、これは221小節からのAs dur、225小節からのfmoll、229小節からのDes durに対応する。465小節から480小節までバスにGが使われ477小節からは右手のトリルのGも保続される。465小節からオクターブが出てくるがグリッサンドで弾く場合、困難であるが、ベートーヴェンが使っていた頃の楽器だと現代のピアノよりも楽にグリッサンドが出来たと思われる。497小節からAs dur、501小節からはfmollになる。509小節ではイタリアの6の音が使われるので、バスのAsから511小節への半音下のGへ行く気持ち強い。542、543小節で和音の一番上の音がEとCであるので第1楽章の301小節の1拍目のE、302小節のCと共通している。515小節から529小節まで主音のCがバスにあり529小節からはI度の和音なので安定感がある。

5. ベートーヴェン ピアノソナタ第23番 ヘ短調 作品57 《熱情》

第1楽章の第1主題は C-As-F と3度ずつの下行で始まるが35小節からの第2主題は C-Es-As と上行する。冒頭は16分音符で数えながら弾くとリズムがきちんと保たれる。又、1小節目の F の符点2分音符を聴き続けて次の As へ、つないでいくと長いフレーズが作れる。決して次の As にアクセントがついて飛び出ない様に。5小節でナポリの和声が使われる。10小節で交響曲第5番《運命》と同じように、同音が3回使われ「運命の扉が開く」動機が使われる。ここで使われるのは Des と C の音で12、13小節でも使われる。冒頭は C-As-F と C の音から始まり4小節目から Des-B-Ges と Des から始まるので、ここでも C と Des の音が重要なのが分かる。42小節の内声は As から Bes へ半音で上行するが、出てきた C と Des のように半音がこの楽章で大切な役割をする。47小節の下行は和声短音階と旋律短音階で使われる下行の音が両方とも使われる。それが顕著なのが G-Ges-Fes の音である。和声短音階では G-Fes が使われるが Ges の音は使われなく旋律短音階では Ges と Fes は使われるが G は使われない。34小節の和音で一番上の音で Des が使われ35小節のオクターブでは C が使われるのも10、12、13小節との共通点である。51小節からのフレーズで53小節のナポリはものすごい緊張感である。57小節からのナポリも同様である。

65小節で H-Gis-Dis とこれでいいのだろうかと質問するように始まり、次の H-Gis-E でこれでいいと答えているようだ。79小節で e moll になり次は3度下がって81小節で C dur、83小節で同主調の c moll から85小節でまた3度下がり As dur になる。91、92小節でバスで As と A の音を交互に半音で行き交うが、これは10、12、13小節で Des と C を半音で行き交うのと共通している。109小節から第2主題が展開していく。132小節から134小節まで運命の動機が Des-Des-Des-C で繰り返される。

134小節から再現部で f moll の属音の C の保続音が続き、139小節で Des の保続音、そして144小節で又 C の保続音が151小節まで続く。保続音の変わり目を意識して弾くと良いと思う。139小節、140小節は Des-Ges-B とナポリの音が使われる。159小節で減三和音の E-G-B、161小節で B-DesE-G の減七の和音と緊張感が高まる。165、166小節で F-F-F-E と運命の扉の動機が使われる。184、185小節で Des-C の音が繰り返される。190小節のバスの F、192小節の Ges はこの楽章で大切な半音の関係である。192、196小節で Ges-B-Des のナポリの和声が使われるが

4小節、5小節と同じ音が使われる。193、197、198小節でDes-Cの音が使われる。194小節でバスでFから196小節でGesの音へ、198小節で左手にF-E、Des-Cの半音が、又200、201、202小節の左手の2つ目から3つ目の和音でもDes-Cが繰り返され、右手も200小節から203小節までF-E-Fの半音が繰り返される。218、219小節でナポリの6の和声の音のB-Des-Gが壮大に使われる。222小節のE-G-Cの和声が223小節はF-As-DesとfmollのV度からVI度へ進行し、I度へ行くのを回避している。235小節から238小節にかけてDes-Cの音が繰り返される。238小節のPiù Allegroで属七のC-E-G-Bが3回、そして次の239小節でF-As-CへI度に解決し、運命の動機が使われる。242小節と245小節の7拍目からのB-C-E-Gの和声が次の243小節と246小節へ、I度のAs-C-Fに行かないでIV調のb mollの属9の根音省略の第1転回形へ回避する。

第2楽章は変奏曲である。テーマが1小節目から、変奏1が17小節から、変奏2が33小節から、変奏3が49小節からで、81小節からテーマに戻る。6小節目のBes-E-G-Desはドイツの6の和音の音が使われている。(Eの音をFesの読みかえと考えると)7、8小節の和音の一番上の音でDes→C→Desが、10小節の和音の一番上の音でAs→Des→C→Desと第1楽章で出てきたDesとCの音が使われる。30小節で右手の最後のフォルテのAsから31小節でBへ音が上がるがピアノになるのが印象的だ。49小節の和声はI度→IV度の第2転回形で、初めて第2転回形が使われる。それに対応する1小節の2拍目や17小節の2拍目、33小節の2拍目はIV度の基本形でバスがGesである。55小節の和音の一番上の音もDes-Des-C-Cが使われる。66小節の左手もDesとCの音、74小節の左手の和音の2、3、4番目の一番上の音もDes-C-Desの音が使われる。又87、88、90小節の和音の一番上の音でもDes→C→Desが使われる。95小節のDes durのV度のAs-C-Esが次にI度の和音に行かないでB-Des-E-Gと減七の和音へ回避する。

第3楽章は減七の和音で開始。5小節目でDes→Cの音が、13、14、15小節でもCとDesの音が繰り返される。20小節でC→F→As→Cと上行するが第1楽章の第1主題はC→As→Fと下行していたので反行している。第1楽章の5小節目で使われるナポリの音が、第3楽章の24小節目でもB-Des-Gesの音で使われる。28小節の左手の和音の上のCの音、32小節の和音のDes、34小節の和音のCの音が使われる。50小節から64小節の16分音符の左手の音は心の中で良く歌うと良いと思う。76、78小節目で右手の1番目でDesが、最後から2番目でCの音が使わ

れる。また 76、78 小節の右手の最後の音は Des だが、80 小節では D に変化するので違いを良く聴くこと。86、88、90 小節の左手の和音も Des と C の音が繰り返される。96 小節から右手を左手が追いかけるが左手をはっきりめに弾くと掛け合いがよく分かる。111 小節で f moll の属七の音が 112 小節で IV 調の b moll の属 9 の根音省略の第 4 転回形へ回避するので Ges-C-Es-A-C の音を力強く弾く。

116 小節の Ges が 118 小節で F へ進むが、度々出てくる Des と C の半音関係との関連があると思う。130 小節の b moll の Es-Ges-Ces のナポリの音も印象的だ。134 小節から 137 小節の B-A-B も半音の関係なので Des-C の半音と関連があると思う。又 142 小節から 149 小節の F-Ges-F、150 小節から 157 小節の C-H の半音も同様。168 小節から f moll の属音の C の保続音が続く緊張感が高まり 176 小節の和音でナポリの 6 の和音の B-Des-Ges-B となるのでここに Des の音が入っていて C から Des への進行がある。184 小節から 205 小節まで減七の音が印象的に続く。

260 小節で f moll の VI 調の Des dur へ転調し、268 小節で f moll へ戻り 268、270、272 小節と B-D-Ges のナポリの 6 の音が使われる。278 小節から 284 小節も右手に Des から C の音が使われる。1 番括弧の 301 小節目で f moll の属七の G-C-E-B が次に IV 調の b moll の属 9 の根音省略の第 4 転回形へ回避するので 302 小節の和音を緊張感を持って弾く。2 番括弧では f moll の I 度へ解決する。300 小節から 304 小節まで旋律短音階の上行形と和声短音階の下行形が交互に出てくるので緊張感が高まる。329、330、337、338 で使われるナポリの 6 の音が印象的だ。341 小節からはバスに主音の F の音を基本として置き、I 度と V 度が交互に出た後、353 小節は I 度のアルペッジョと和音で激しく締めくくられる。

おわりに

今まで分析していた曲と、今回新たに分析した曲をまとめてベートーヴェンの 5 つのピアノ・ソナタについて書いたが、今回の執筆によりこれらの曲に対する思いが一層深まった。ベートーヴェンの曲を演奏すると生きるエネルギーを得られるように思う。

参考文献

大木正興他 1980 『最新名曲解説全集第 14 巻（独奏曲 1）』 音楽之友社。

児島新 1985 『ベートーヴェン研究』 春秋社。

島岡譲他 1965 『和声 理論と実習 II』 音楽之友社。

諸井誠 1978 ブレンデル 『ベートーヴェン：ピアノソナタ全集譜例』。SFX-9664~76

(レコード製作日本フォノグラム)